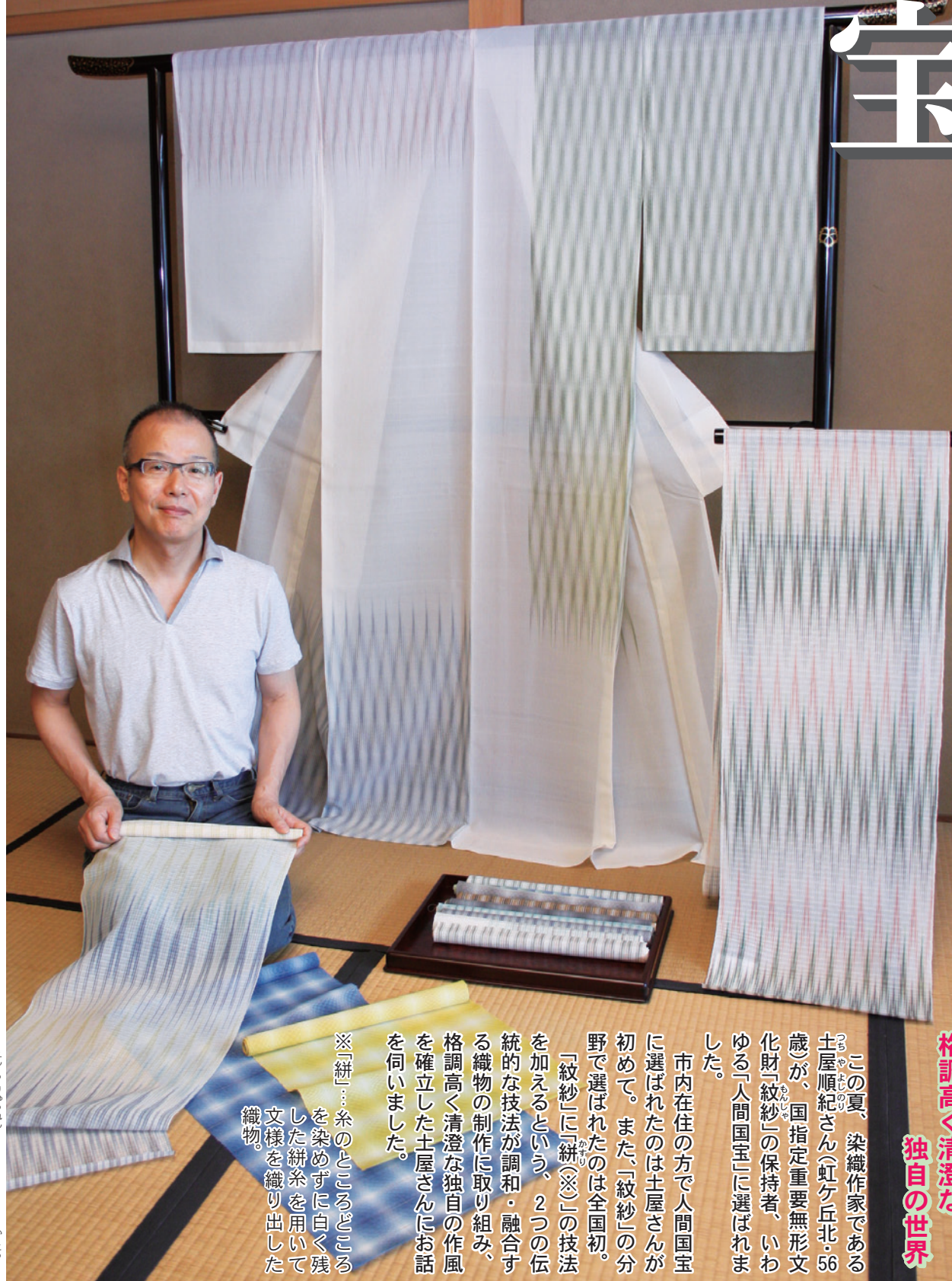


関市初 人間**国**宝



**格調高く清澄な
独自の世界**

この夏、染織作家である土屋順紀さん（虹ヶ丘北・56歳）が、国指定重要無形文化財「紋紗」の保持者、いわゆる「人間国宝」に選ばれました。

市内在住の方で人間国宝に選ばれたのは土屋さんが初めて。また、「紋紗」の分野で選ばれたのは全国初。

「紋紗」に「緋（※）」の技法を加えるという、2つの伝統的な技法が調和・融合する織物の制作に取り組み、格調高く清澄な独自の作風を確立した土屋さんにお話を伺いました。

※「緋」…糸のどこどこを染めずに白く残した緋糸を用いて文様を織り出した織物。

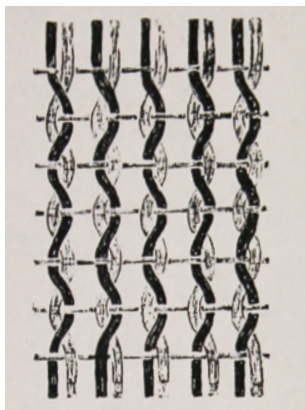
▶ 紋紗着物「煙雨柳簾」と紋紗帯「荷香」

「紋紗」とは

紗の生地異なる織り方で文様を織り出した先染めの織物。

紗は振織の一種で、経糸2本を組織単位として、交差させた経糸に緯糸を通して織り、経糸が左右にからみながら組織される織物で、織り目に部分的に透き目ができ、軽くて薄いものとなります。平安時代以降「うすもの」と称して公家や能装束などの夏衣料に広く用いられてきました。

◀「紗」の組織展開図



紋紗は、織物技法の中でも複雑でありながら、その作品は薄くて創作性があるため、古くから人々を魅了してきました。今日では、伝統的な技法に基づきながらも、創意工夫を凝らした芸術性の高い表現が可能な染織技法として高く評価されています。

「自然から色をいただく」という姿勢を学びました

——伝統工芸に興味を持ち始めたのはいつから？

子どもの頃から美しいものが好きで、仏像など、他の子とは少し違ったものに興味を持っていました。

本町3丁目に住んでいたのが、吉田観音や善光寺には自転車がよく通いました。能面や能装束にも興味を持っていて、春日神社へもよく行きました。見るだけでなく、自分の手で作りたいという気持ちもありました。

美術系の大学に行きたいなど漠然と思っていたので、高校2年の頃に日本画の先生に付いて簡単なデッサンから始めました。

いろんなものに興味を持ったり、自分の生きていく道を探り始めたりするのが高校2年ぐらいのときだと思います。歌舞伎を見始めたのも高校2年のときで、いろんなものが一気に自分の中に流れ込み、人生においてさまざまなものに会えることができました。

——専門的に学び始めたのはいつから？

京都の専門学校に入学しましたが、あとで考えると、それが自分にとってうまく道として出来上がっていたような気がします。そこで植物染料に出会い、すごく興味を持ちました。

その学校の卒業生に重要無形文化財「紬織」保持者(人間国宝)の志村ふくみ先生の娘さんがいて、みんなで志村先

生の工房へ見学に行きました。

そこで、自分がそれまで植物染料で染めたものよりもきれいで鮮やかな色を見てさらに興味を持ち、専門学校を卒業後に志村先生へ弟子入りました。

——志村さんから学んだことは？

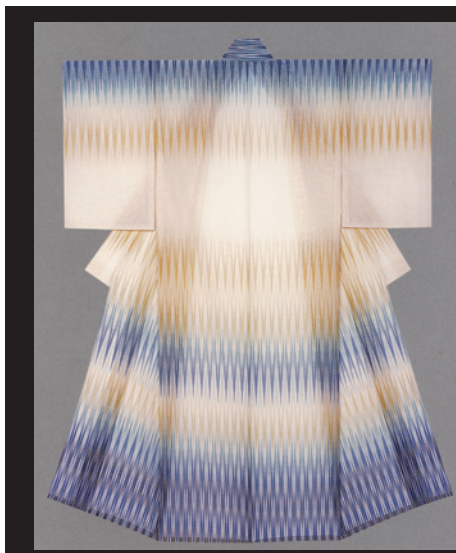
志村先生のもので3年半お世話になり、「自然から色をいただく」という姿勢を学びました。

自然から想像以上のものを得ることができそうです。例えば黄色ひとつとっても、植物からいろんな黄色を染めることができ、そこに感動があります。感動がなければ次へ進むことができません。

また、ものに対する考え方や見方、ものを作るときの基本的な姿勢も教わりました。

つちやよし のり 土屋 順紀 プロフィール

- 昭和29年 関市本町に生まれる。
- 昭和53年 京都インターナショナル美術専門学校卒業後、重要無形文化財「^{つむぎおり}紬織」保持者(人間国宝)の志村ふくみさんに師事。
- 昭和56年 関市の自宅前に工房を構え、染織家として独立。
- 平成8年 第43回日本伝統工芸展で、日本工芸会総裁賞受賞。岐阜県民栄誉賞受賞。重要無形文化財「^ろ羅」伝承者養成研修会に参加し、保持者(人間国宝)の北村武資さんに師事。
- 平成9年 社団法人日本工芸会正会員(～現在)。
- 平成15年 関市民特別奨励賞受賞。
- 平成18年 第53回日本伝統工芸展で、文部科学大臣賞受賞。
- 平成21年 紫綬褒章受章。



紋紗着物「月下溪韻」

第53回日本伝統工芸展
文部科学大臣賞受賞作品
(平成18年)

長良川のせせらぎをモチーフに、月明かりに照らされた溪流を表現した精緻で清新な作品。

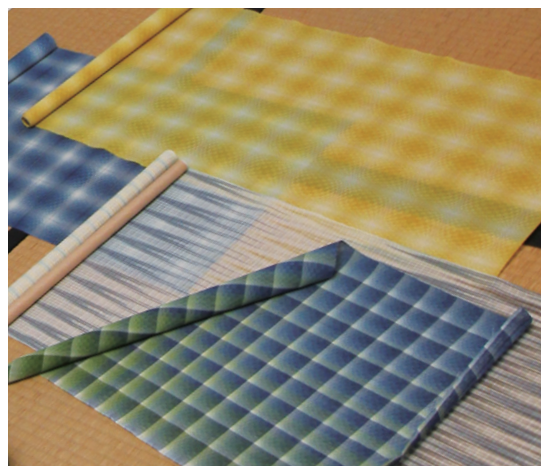
原料となる植物はなるべくこの辺りで取っています

——「紋紗」を織り始めたのはいつから？
平成8年の重要無形文化財「羅」伝承者養成研修会に参加したとき、保持者（人間国宝）の北村武資先生から教わったのがきっかけです。

紋紗の技法はどんな文様でも織れるのが基本。幾何学や石畳などのほか、花や蝶などの文様も織れますが、私は普通の織機で織れる自分なりの紋紗を織っています。

植物染料の特徴は？

明治時代に入るまではすべて植物から色を染めていたので、現在も、どの植物から何色が染まるかは本などで調べられます。ただ、生えている場所や季節などそのときの植物の生育状態に



▲土屋さんが織ったさまざまな「紋紗」



▲植物染料で染められた色鮮やかな絹糸の数々



▲ずらりと並ぶ染色済みの絹糸

よって同じ色が染まるとは限りません。原料となる植物はなるべくこの辺りで取っていますが、黄色を出すカリヤスは郡上の奥まで取りに行っています。どんぐりやバラからは灰色が出ます。バラは枯れる前に細かくして冷凍保存することもあります。乾燥させたり、冷凍させたり……。また、この季節にこれを染めておかまいといけないというのがあるので、糸は染めた状態で保管しています。

緑色は植物染料では出ないといわれています。黄色と藍色を染め重ねて出します。あとは1つの植物から出る染料をそのまま使っています。

どの植物からも色が出ます。びっくりする色が出ることもあります。そういう場合は染料にはならないことが多いですね。

植物の茎や葉、根から出た色で染め、

花から出る色で染めるのは紅花だけです。植物は花に色を出すために、茎や葉、根に色としての何かを持っています。色を出してしまつた花からは、染料として使えるような色はもう出ません。

いちばん注意を払うときは、糸を染めているとき

——「紋紗」の制作にかかる時間は？

織るだけで1カ月。その前後の作業も含めるともう少しかかります。一生懸命織って1日30センチしか進みません。年間3点は紋紗を織っていて、他に紬、生絹なども合わせると7、8点ぐらい作ります。紋紗は時間がかかります。

制作する上でいちばん注意を払うときは、糸を染めているときです。いちばん楽しい作業でもありますが、いち

ばん緊張します。自分の納得する色が出なかったら次へ進めません。

土屋さんの紋紗の特徴は？

5段階に染める「ぼかし」の手法でグラデーションをつけた「緋」を組み合わせています。

この辺りの風景を見るとかすんで見え、特に夏は水蒸気が多くてぼんやりとしています。この優しい自然の中にいることが、5段階に染め重ねる手法の誕生につながったと思います。

「紋紗」で保持者に選ばれたことには驚きましたが、自分がやってきた「緋」との組み合わせということで納得できました。グラデーションをつけた緋を始めた頃は、なかなか受け入れてもらえませんでした。が、今まで続けてきてよかったです。そして、これからも続けていきたいです。

▷放映日時 9月3日(金)～30日(木)

月・水・金・日曜日 午前11時45分～正午

火・木・土曜日 午後8時45分～9時



▲ 5段階のグラデーションに染められた絁糸 かすりいと



▲土屋さん愛用の織機



▲植物染料の原料である(上から)ドングリ、カリヤス、イチイ



▲経糸の間を左右からくぐらせて緯糸を通す道具「杼」たていと。織物によって使い分ける。



▲紋紗を織る土屋さん

技よりも感性の方が自分にとっては重要な部分

——今までに「つらい」「やめたい」と思ったことは？

好きなことを好きなようにさせてもらって今があるので、つらいとか、やめたいとか、まったく考えたことがないんです。質問でよく聞かれますが、笑ってしまうぐらい、ないんです(笑)。作品が完成すると、それまでのいろんなことがすべて帳消しになり、満足感というよりは達成感がわいてきます。それですっきりして次へ進む。その繰り返しです。火をたいて植物から色を出して糸を染める作業では、熱くてすごい状態になることもあります、それはどうってことないです。

後継者の育成は？

私としては、作品を見た若い人たちが魅力を感じて、染織の道が続けてくれることがいざばんありがたいです。教室を開いたり、だれかに教えたりしたことはありません。自分がそうであつたように、いきなり紋紗を織り始めるのではなく、まず色に興味を持ち、簡単な平織ひおりから始めるなど、そういう入り方をするので、ある程度染織をやってみて、紋紗にも興味を持っていたら、と大変うれしいです。

「織り」ではなく「染め」から染織の道へ入ったので、技よりも感性の方が自分にとっては重要な部分だと思っています。「ものづくり」というと、技術の面が注目されがちですが、ものを見て感じたことをどう表現するのか、何度

か経験を積んでいくうちに感性の部分

が重要だと考えるようになると思いますが、感性の部分は教えて教えられるものではないので、美しいものを見たり聞いたりして、自分自身の感性を磨いて豊かにしておく必要があります。

手から手に、人から人に技法を教えるだけでなく、よい作品を残すことによって、次の時代の人たちが何かを感じ、やる気を持ってもらう。伝統とは、そうして受け継がれていくのではないのでしょうか。

——今後の作品は？

これまで通り、自分が美しいと思うことを表現し、見る人も美しいと感じられる作品作りを心掛けていきます。そして多くの方に見ていただきたいと

願っています。

今から考えれば、関に戻ってきたことで、自分自身を見つめ直すことができました。この土地で生まれ育ったことから、長良川の流れをテーマにした作品ができ、今回のような結果につながったのではないかと思います。

——今後もさらなるご活躍をお祈りします。本日はありがとうございました。

土屋さんの作品が展示される展覧会の案内

第57回日本伝統工芸展

【東京】9月22日(水)～10月4日(月)

会場：三越本店

【名古屋】10月6日(水)～10月11日(月・祝)

会場：三越名古屋栄店

以後全国巡回

【人間国宝・土屋順紀さんを紹介する広報番組のお知らせ】

ケーブルテレビCCN・チャンネル長良川

明日を創る関のまち(9月号)「人間国宝 染織作家・土屋順紀」